

〔「太平記」の記述〕

赤坂城で焼死したとみせかけた楠木正成は、元弘三年四月、湯浅定仏が占領していた赤坂城を急襲し、奇計をもって奪回した。その後、天王寺の周辺に進出した正成は、隅田・高橋らの六波羅勢を巧みに渡辺橋より追い落とし、武勇すぐれた宇都宮勢は包圍作戦で追い帰した。

※楠木正成が天王寺に進出した時期には、①赤坂城奪回直後（元弘二年五月）と、②千早城完成直後（元弘三年閏二月）の二説がある。

常葉駿河守（範貞）※、京都成敗辞退の事。

（常葉の探題辞退は賢明）

○これを評して云えば、北条高時の（軽率な）行動に天下の武士は内心で高時に背いていたのを見聞して、世間の危うさを知り、また今、乱を鎮めたことの功績として、職を退こうとするのは、非常に賢明なことである。笠置の城は落とした。楠木や桜山といった逆徒は退治した。（越王の勾踐を助けた范蠡の）功成り、名遂げて、身退くということであろう。

（常葉と范蠡の比較）

○これを評して云えば、越の范蠡（はんらい）が心力のかぎりをして呉を亡ぼしたのと、この度の常葉が西国の乱を鎮めたのでは、勇と、智謀と、忠と、義と、仁において似るべくも無い。万にしてその一つにも、及び難いものである。この程度で范蠡を真似たとすることは、片腹痛いことであるけれども、高時の行いは、祖先と異なり、著しく劣っている。諸国の武士は高時を善く思っていないことや、一家の人々が不和になっていること、諸国には党が多くはびこっていることを十分に配慮して、武運も尽きたとの思いから、身を退くことになったのである。少しは范蠡を真似たのであり、それは善しとしよう。

※常葉駿河守範貞……生年不詳、没年：元弘三（一一三三）。鎌倉末期の六波羅探題。北条時範の子。

越後守、駿河守を歴任。正和四（一一一五）年引付衆、元応二（一一三〇）年評定衆となる。元亨一（一一三一）年、六波羅探題北方に就任し、元徳二（一一三三）年まで在京。在任中に正中の変が勃発し、これに対処。鎌倉下向後、評定衆・引付頭人となったが、幕府滅亡に際し北条高時ら一門と共に自害した。

（湯浅の油断）

○楠木が、昨年に赤坂において、焼死した真似をして落ち延びたのを、次の年の四月まで聞き出ださなかったのは、湯浅定仏が油断していたからである。

（正成らを探知できなかったのは不審）

○これを評して云えば、正成一人だけではない。家の子・郎従五百余人、その他の男女や幼子、およそ二千余人であり、これらは金剛山の奥などに深く忍んでいた。いかに隠そうとしても、隠しきれぬものではないのだが、それを知らなかったのは不審である。その上、湯浅は遠国の武士ではなく、紀国育ちの人である。このような近場であれば、それらの事情にもよく通じているであろう。もしも、湯浅一人が事情を知らなくとも、郎従が皆知らないということがあろうか。

（大和・河内・紀伊などの山に遁れた例）

また、大和・河内・紀伊・伊賀等の国は、大きな山々の深くにあることから、他国から攻められ、事が急を要するときは、深山に引籠もり、亡難を遁れて命を全うし、時を待つというような事例が、大昔から多々あった。

(神武天皇に叛した夷の例)

それゆえに、神武天皇が(日向から大和へ軍を進めて、「熊野の山の荒ぶる神」をはじめ、大和周辺の山々にいた「国つ神」や「夷」を平定し、橿原宮に居を定められた際に)帝に背いた夷を退治されたといえども、残党は山奥深くに引籠もり、諸人に害をなしたのであった。このため、帝は日向での殿作りを諦められて、大和に殿作りをされたのである。

(天武天皇の例)

その後、清見原の帝(天武天皇)が大海人皇子であった頃、大友皇子に襲われることがあられ、この山中に分け入られて(吉野宮に一時お隠れになられ)、危ういところで御存命あそばされた。終には大友皇子を亡ぼされ、天下を保たれたのである。その他にも、この山中に籠った人で、簡単に討たれたことはほとんど無かった。これらの事を知っていたならば、どうして楠木が、もしや生きながらえて山中に居るのではないかと思わなかったのだろうか。

(楠木らの死を信じたのは不覚)

また、正成は智謀において無双の弓取り(武人)であることは、天下に明らかである。たとえ大勢にて囲まれたとしても、一方を討ち破っても落ち延びるのは必至であるが、そうではなくして早く自害したのを、不審に思うこともなかった。また、郎従五百人が一人も残らず自害するの不審なことである。さらに、楠木郎従らの妻子が多数城中にいれば、あるいは飢えて死ぬものもあるだろう。女は次の夫に嫁ぐこともある。また、幼少の子は、湯浅の家の子や郎従にも保護されて、一身を助かることもあるだろうに、そのような者が一人も居ないのは怪しい。これらの事を意識して楠木の行く末を聞き取れば、死んだか、生きているかぐらひは聞き定めることができたであろう。それらを全く知らないで、ただ楠木は死んだのだと思い込んで、安心してくつろいでいたことは、不覚の最たるものであった。

(敵の国主と子孫は必ず討つべし)

敵が亡んだ後に、その国を守ろうとする者の心得というものがある。一つには、先の国主が未だに命があるならば、朝夕に思案して、これを討たねばならない。二つには、先の国主の子孫となる者は、胎内をも捜してこれを殺害せよ。ただし、女子は除け。これらを生かしておいたならば、末の世に至って、どうして敵とならないことがあるうか。

(敵国治政の法)

三つには、先代の法律の是非を聞いて、諸人が喜んでいる法律を残して、諸人が患っている法律は廃止せよ。こうすれば、人々は先代を疎んじて、当代に親しむようになる。ただし、人の評判が様々である法があれば、多くの意見を聞いてから善悪を定めよ。また、これから先のことを分別して、後代の支障となるようであれば、諸人が喜んでいても、用いないようにせよ、と云われている。

(無智無策の湯浅)

これらは古典に示されている法である。湯浅がこの理を知っていたならば、正成の死生を尋ね聞き、その所在を知って、これを討つべき謀をなすべきであったが、それでも正成を討つことができなければ、城を取られないように用心したであろう。また、関東(幕府)・六波羅(探題)へもこの事を急いで報告するとともに、軍勢をも招致して、国を鎮めることになったであろう。このような手立ては一つもなく、のうのうと楠木の旧領の地頭におさまっていたのは、将ではない。名付けて将の中の国賊という。

(湯浅の暗君ぶり)

およそ、この湯浅の心中を量るに、「楠木は生きていた」と人が云うのを強(あなが)ちに嫌い、怒りに顔を赤くしてこれを用いない。へつらい者たちが来て、「楠木は死んでいる」と語るのであれば、これをうれしく思い、「勿論である」と云って、微笑むのであるから、正成が存命であるとは、郎従も家の子も云えなかったであろう。これは、闇主(暗愚な主)の好んでなすところである。

(正成生存の実否を探求せず)

湯浅が生きているといえ、死んでいる正成が生き返るといってもいい。また、死んでいるといえ、生きている楠木が死んでしまうものでもない。そうであれば、正成が生きているとの情報があれば、いよいよその実否を聞いて確かめるのが当然であろう。これを諭たと見えるならば、元日・三が日に、五百八十年を祝う(末永く長寿を祝う時に用いるめでたいとえ)ことを実と思ひ、また、四、五歳の幼児に、それで仙術を行った御器を戴かせれば、千年生きると喜ぶのに似ている。なんとも拙(つたない)ことである。

元弘二年四月三日、楠木三百余騎にて、赤坂へ押寄せたる事。

(楠木、赤坂城を攻撃Ⅱ下赤坂城の奪回作戦)

○伝えられるには、正成は金剛山の奥にある観心寺という所に忍んでいた。郎従五百余人は、諸所に散らばって、大和・河内・紀伊の山中に居た。その多くは野長瀬兄弟が好意により扶助している所に居り、大塔宮は吉野に一城を構え、御陣を召されていた。このような状況において、楠木は、そうであればと家人共を集め、内々に用意をしていた。

(赤坂城攻撃の理由)

初めの合戦には、赤坂城を攻めようとかねて思っていた。その理由は、元来正成が構築した城であるから、家の子・郎従に至るまで、城内の様子をよく知っていた。また、郷民は正成が代々持っていた領地であるから、皆本来の主人に好意を持っていた。城内の様子も知らずに他所の城を攻めるよりは、攻め易いことから、このように思い立ったのである。

(正成、忍びの活用)

やがて、赤坂を偵察するために間者を潜入させて、城の様子を見せると、この城は全く粗末な防備であった。糧は少なく、矢の用意も無い。所々の戦陣の詰め所には垣楯(かいたで)も無く、きちんとした武具も調っていない。内外の城に、人家が六十八あり、兵数はおよそ五百人に過ぎなかった。

正成は、さらに十分見ておかねばと思って、恩地の左近太郎を、忍びに紛れ込ませて派遣した。見知らぬ人ばかりだと思つた恩地は、かつて、我が領内に猿回しの八郎太夫という者がいたので、この者に猿を引かせて、自分は仲間になって、薪に玄米・なめみそなどを隠し入れて、これを背負い、鬚を剃って、布衣(ほい)無紋の狩衣のわけも見えず綴っているのを見て、昔の小笠の古びたのを深く被って、この猿回しの後について、白昼に城内に入り、あちこちで猿を舞わせながら、城中の構えや人数と配置を思うがままに見てきたのであった。

(湯浅、籠城)

正成が恩地に城内の様子を問うと、先に語つたとおりであった。そうであれば、疑うべくも無いと四月二日に観心寺を立ち、三日卯の刻(午前六時頃)に、正成は五百余騎で赤坂城に攻め寄せた。湯浅も対当の勢であるからには、城を出て戦うのかと思えば、正成の勇猛さに恐れをなして、軍兵の一人たりとも城から外に出なかった。

午刻(正午頃)になったので、正成は一里(約四キロメートル)程引き退いて、平地の中に少し小高い山に陣を取った。ここは、敵が寄せ来たとしても、防ぐのに適した地形であった。

(正成、湯浅の兵糧隊を襲撃)

開けて四日の卯刻(午前六時頃)に、正成が城に潜入させていた忍びが来て、「城中に糧が乏しくなったので、紀伊国の阿瀬川から、兵糧を運び込みます」と報告すると、正成はこうした事も確かに有るだろうと、和田・恩地・安間・高安らを始めとして、宗徒の勇士三百余人を、紀伊と河内との境にある木目峠(現在の紀見峠)に指し遣わした。

同月七日の夜半に、湯浅の兵士ら三百余人が、兵糧を午に負わせ、または背負いながら、木目峠を越えるところを、和田・恩地の二百余騎は残して、百騎がどっと叫んで駆け出たので、湯浅の郎従は馬を捨て、

背負っている米を捨て、逃げ帰った。

楠木の郎従は、城以外の方向に逃げる敵兵はわざと追わなかった。その理由は、三百余騎が備えを乱して追ったとして、もしも経験豊かで必死になった敵兵が駆け抜けて、赤坂の城に入って、このことを知らせたならば、その後の謀は成り立たないからであり、それゆえに一人も通してはならないからであった。こうして、首を十二取ったのだという。

(赤坂城落城)

明けて八日、まだ卯の初(午前六時前)の早朝に、楠木が湯浅の城近くにて、同士討ちをして、城を取った。これは、『太平記』に記されたとおりである。

○これを評して云えば、正成がこのように謀ったのであれば、神通力を得ている者ならいざ知らず、世の中における通常の凡夫で、この謀に乗せられない者はいないであろう。始めに攻め寄せた時、湯浅勢が城を出たならば戦おうとして、楠木は城中に忍びを潜入させること八人、その上、追手(正面)から出てきたならば、搦手から城へ入れようとして、宗徒の兵士を百余人、搦手の南に配置し、竹原や麻の茂っている中に隠して置いたのである。

(楠木の深い智謀)

その日、湯浅の郎従たちが、「敵は無勢(少数)なのであるから、城を出て合戦をなされては」と勧めたのであるが、湯浅は思慮深くして出なかった。この時の謀に乗らなかったのは、湯浅の智が深かったからだと云えよう。また、この謀に乗せられたとしても、湯浅の不覚ではない。ただ、正成の智謀が深いがためである、と言うべきであろう。

(湯浅の不用意)

ただし、戦い始めて十日と立たないうちに食糧が尽きて城を落とされたというのは、湯浅の不覚である。その理由は、世の中が鎮まって後、この『太平記』を書くときに、千種忠顕に向かって正成が語ったことによる。正成は云う。「ほとんどの城は、国の境にある。必然的に、敵の猛勢が自国に乱入しようとする時には、小勢で籠り、大勢を防ぐことができるようになっていく。他国の大勢がその城において日数を経ている間に、国中の軍勢を寄せ集め、後攻めをするのである。

(籠城戦には水が第一)

中程度でも五十日、長期戦では百日の用意をするものである。第一には水である。いかに嶮しく、敵が登れるような地物が無くても、水の無い峰であれば、何ができるだろうか。第一に水である。

(第二に兵糧の用意)

第二に食糧である。糧は城中の人数を把握して、一千人であれば、五千人の用意をする。兵士は、一日当たり玄米一升、将には二升と心得ておくこと。そうして、これを兵に与えるときには、兵に玄米六合とし、兵が働く日には、三合を増せ。将もこれと同じようにせよ。少し余るようであれば、これを予備(備蓄米)とする。

(平素の数倍の糧が必要)

このようにして、五千人分の食糧を以て、千人に充てるのはなぜかと云えば、城を敵に囲まれた日は、夜中にも白昼にも、兵の口中に食が断えるならば、兵が疲労するからである。大人物は色に迷い、小人物は食べられることを希求するものである。このことは『三略』にも書いてある。このような場合には、糧は思うよりも早く減っていくものである。これゆえ、兵糧を城中に置かないのは、城主の嗜むべきことではない。不覚と云うべきである。

(矢の蓄えも必要)

また、矢はその数を定めることはしない。およそ城中の将は、「あだ矢(外して無駄になる矢)を射るな。敵が近くに来た時にこそ、射よ」と下知するけれども、気持ちが臆している兵であれば、前方の当るかど

うかも見ないで、矢を射捨てるものだからである。」

(矢狭間の工夫)

また、「狭間(＝城の堀・建築物から矢・弾丸を発射するために設けられた小窓)の切り方はどのようにするのか」と忠頭が質問したのに対して、正成は、「それは、弓法でも特に重要なことであり、家ごとに申し伝えられたものがある。その種類は多くて、語り尽くせない。千早で切らせたものは、城の脇岸に三尺五寸(約百六センチ)の人形を立て、狭間からこれを射させて、とにかく射易いように切らせたものである。人は嶮しい所を登るには、いかに達者であっても、腰をかがめるものであるから、四尺はあるのだけれども、(それよりもやや小さい)三尺五寸の人形を射させたのである。平地の城であれば、向かい合って射るのであるが、岸が高くて嶮しい山城であれば、降りこぶしの矢となり、射られないものである。

(城のまわりの木立)

また、城の向かい堀の外に樹を植えるのは、非常に悪しきことである。寄せ手は、それを楯にして攻め寄せるのであるから、ただの木だけではなく、切り株でさえも、寄せ手はこれを利用し、楯にするのである。また、林があれば、城中から敵が攻め寄せるのが見えない。このように、悪しきことばかり多いのである。

(城内の植樹は防衛の便り)

城下に林があるのは、城から隠密に人を出すには、少々便利なものである。しかし、損が多くて得は少ない。このために、正成が赤坂の城を構築し初めた頃、堀から三間(約五・四メートル)離して内側に樹を植えたのである。その意味するものは、敵が堀に登り、または破壊したりして、城に打ち入ろうとする時、家室(＝城内建築物)と堀との間に、松・柏が生い茂って有ったならば、味方は防ぐのに便利であり、敵は容易に打って入ることができない。

(樹木の用途)

また、一切の樹木の葉は、松の他は若葉のときに取って、蒸して乾かして置いておけば、皆食物となる。さらに枝を取って薪とし、大きなものは木材として利用する。このように分別したのである」と申したので、諸将は皆、これを信じた。それに対して、湯浅が城中で十日のうちに食糧が乏しくなった様に、常々その用意が無かったことは不覚である。

(楠木の智略)

正成の兵士が同士討ちをするのを、湯浅が実際の事だと思って、敵兵を城中に引き入れたことは、不覚というには当らない。このように謀ったならば、聖者でもなければ、誰が騙されないであろうか。また、湯浅入道が降伏してきたのは、人倫に反することである。

(湯浅の忘恩)

○これを評するに、事に臨んで謀を廻らし、節に及んで死する事、これが勇士の法である。また、恩をいただいて恩に報いる、これが人倫のなすところである。そうであれば、六波羅が湯浅に正成の旧領地を与えたのは、大変に重たい恩である。何の恨みがあつてか、正成に与して(六波羅の)敵となったのか。あれこれと湯浅の思いを推察すると、身命の重さに恩を忘れ、義に迷ったのであろう。これは勇士の振る舞いではない。生きて人に後ろ指さされるよりは、いつそのこと死んだほうがよい。これらは人の皮を着ている畜類である、などと云われている。

五月十七日に楠、天王寺に出し事。

(八尾の楠木服属)

○伝えられることには、正成が赤坂を攻め落として後、同じ国である八尾の別当顕幸を味方に引き入れようと説得すると、顕幸はやがて百五十騎で馳せ参じて、正成に服属したのであった。この別当は、早くから正成の父正玄と常に領地のことに関して争いごとがあり、遺恨が深かった。それが、どうしてこの時に

服属したのかと云えば、それは正成の智謀が深かったからである。

正成が、未だ赤坂に出向いていない頃、大塔宮に申し上げるには、「八尾の別当顕幸は、武勇の誉れある者であります。彼が味方として参らなければ、河内を退治することは難儀でありましょう。その意思は浅くして正直な法師でございます。常に官位を意識する者でございます。正成とは、とある事情から不和にございます。正成が赤坂に出向かいたる後は、何を仰せられても、勅に従うことのない者でありましょう。令旨をしつかりと調えられて、彼の気持ちを和らげて下さいませ。必ずや味方に参って、忠実に戦うことになりましょう。先ず、謀として権僧正号（僧正は最上位の僧官。大・正・権の三階級があり、権僧正は参議に相当）を下され、天下が安らかになった後には、恩賞を望みどおりとされる旨仰せになってください」などと申せば、宮は、「彼の敵意が解けて、味方に与するのであれば」と仰せられた。そしてすぐに令旨を顕幸に下された。

顕幸は、「法師の上に僧正を下されようとの事、武士の面目もまた余りあること」と云って、味方の義戦に与しようとしてきた。しかしながら、「ただし、正成の存亡については風聞に様々である。彼が生きていて、味方に忠誠を誓って戦うようであれば、顕幸の軍が忠を尽すことは絶対でないであろう」とも云う。宮は、これは難儀であると、この由を正成にお伝えにられた。正成が申すには、「事情はよくわかりました。令旨に代えて、彼の気持ちが打ち解けるように申していただきとうございます」とのことであった。そこで、顕幸には遣いの者を通じて、「正成の存亡は全く承知していない。世間のうわさでは、あるいは存在し、あるいは亡き者であり、実際のところは何とも言い難い。生きているのであれば、なぜ当山に参らないのであろうか。万一存命して河内へ出向いたとしても、今まで予（われ）に与せずして、別の企てがあったのなら、何ほどの忠誠心があろうか。朝敵と同じようなものである。この後、正成が申し入れたとて、全く用いるつもりは無い」と仰せられたので、顕幸の気心は解けて、御味方に参りましようとの勅答を申した。

その後、十日ほどして、正成は赤坂に出向いた。顕幸は宮へ「御存知でございますか」と申すと、ご存知ではないと仰せられた。そのため、顕幸は赤坂への後詰めをしなかった。

赤坂を攻め落として、威信が強まってから、正成は顕幸の元へ次のように申し伝えてきた。「正成は、愚か者なるがゆえに、この一大事を思い立つこと、実に世の人も片腹痛く思われていることでしようが、勅命には背き難いことから、死んだことになっているのを忘れておりました。ただし、貴僧の訴えによって、宮が不審に思われる点多々あることが分かりました。私を以て公に事を忘れるのは、人たる者のせざるところでございます。従いまして、今日以降は、昔からの恨みをお忘れください。正成には全く不忠の心はございませぬことを、どうか大塔の宮にお伝えになってください。今は父祖の恥を忘れて、そなたに降参いたします。勅敵を追罰する事、万事を取り仕切っていただきたくお願い申し上げます。それさえも、叶わないということであれば、なす術もございません。そうであれば、私の敵、または朝敵退治の支障ともなりませんれば、天下の御敵でございますから、そなたの館へ参って、一戦を交えましょう」。正成がこのように申したので、顕幸は「いやいや、宮に与していたことこそ、早速、京（御所）に伝えましょう。私的な事で戦うようなことは、今の楠木殿には相応しくありません。また、仰せられることも実にもつとでもござる。名将が降参された上は、これ以上の面目はございません」とのことです。「大塔宮が御不審に思われている事は、この顕幸が、よき様に申しておきましょう。これから後は、宮の御辺（お近く）で一緒にあって忠節を尽しましょう」と申していたのが、その勢百五十騎を引き連れて赤坂に来て、正成と一手になったということである。この謀こそ、最も恐るべきものである。

（和泉・河内の御家人、楠木に服属）

後にこのことを、正成が顕幸に語ると、顕幸は笑って、「実にうまく謀られてしまったものです」と云ったものである。それから後は、和泉・河内両国に所在する御家人は皆、正成に随順して、その勢力が強大

に成っていった。

楠、渡辺の橋より南に陣を取る事。

(楠木、渡辺橋南に出陣)

○伝えられるには、正成には思うところがあった。異国では大昔、孔明(諸葛亮)が盲の敵を引く※と云う事がある。(※ 要害を利用して敵を待ち、引き付けて討つ)この度の謀がこれである。つまり、良将は敵国を攻めるのに、敵が軍勢を備えて待っているか、待っていないかにかかわらず、時に当って、味方に有利である場所へと向かうものである。

闇主・盲将はそうではない。敵が要害に陣を取って待っていると、敵のいる場所へと向かっていくのである。正成が云うには、「六波羅の仲時・時益は盲将である。我が待つ所へ向かうであろう。敵の気を察してのことである。盲者は人が言うことを聞いて来る。盲将もこれと同じである。敵がいるのを聞いて来るだけであって、勝つべき謀などは無いのだ。正成が渡辺にいと云えば、六波羅は必ず渡辺に向かうであろう。(大軍には鳥雲の陣)その兵士は、約五、六万にも及ぶであろう。味方は三千をわずかに超える程度であろうか。これで五万の軍士を防ごうとするのであれば、鳥雲の陣※に及ぶものはない。(※ 険しい峰や大河を利用して、小勢で大敵を防ぎ戦う戦法 『いわゆる鳥雲とは、鳥のごとく散じて雲のごとく合い、一連の堀を構えようとした。(堀と強弓の備え)四町ということは、敵が川を渡って、軍勢を備えようとすれば、地積が狭すぎて備を調えるのが難しく、攻め駆ける時には、四町は長くて兵が疲れるものである。その上、行く先には一連の堀があれば、どうなるであろうか。堀は長さ三十間(約五十四メートル)、堀の外端に逆木(さかもぎ)を結いて、また、左右より十五間(約二十七メートル)前に出して堀を構え、これも長さ三十間、堀の外端に逆木を結う。このようにして数町(数百メートル)に連ねて、兵士の数に相応させるのである。堀の内端に土居を高く築き、内側に強弓を備えるべし。堀三十間の左右の間隙は、門である。門には騎馬の兵を置いて守らせよ。

(足軽と騎馬)

そうして、足軽を出すには、十人、二十人、または四十人を一組とする。五十人より多くなると、進退が軽快にならなくなる。物具(ものぐ)鎧兜は着装しない。矢を腰に四、五本指して、敵が川を渡ろうとする時、川端に至って射させる。敵が追ってくる時は、「疾きこと風の如く」逃げよ。敵が滞留しているならば、近くに詰め寄って射るようにせよ。敵が遠くまで追うならば、堀に至るであろう。堀に至ったならば、十五間の左右の門から入る時に、堀の内端に備えている弓により射よ。敵が敗走すれば、騎馬により攻めかかれ。堪えているならば、さらに射よ。漂っている(右往左往している)ところを騎馬が出撃して攻めかかれ。ただし、遠くまで追ってはならない。一町(約百九メートル)あるいは半町(約五五メートル)で騎馬は引け。足軽は後を追え。間違ひなく敵を川へ追いつめることになる。敵は、先陣二軍の備が、三軍の備えを川へ追い入れることになり、後の軍勢は渡ることが困難になる。もしも、強力な軍勢で渡ろうとするならば、益々足軽によって射よ。このようにして四、五度に及べば、敵軍の備えは必ず乱れる。その時こそ、騎馬にて追撃せよ。たちまちにして勝つことになる。

概略は、この図により、理解できるだろう。

(*足軽と騎馬の絵図)

このような備を設けることで、六波羅は先陣の一陣二陣が川へ追い入れられたならば、後陣は渡ることができないまま、日数を送ることになるが、その間にも様々な智謀があらねばならない。それに加えて、軍勢は皆、食糧が不足するようになり、または一戦も交えず恩賞にも与れないことから、将の威厳も無くなる。威が軽くなれば、兵たちの不満も多くなる。不満が多ければ、将兵の心もバラバラになる。そんな

れば、恨みを抱く兵も多くなる。この時に至ってこちらに招けば、どうして寝返らないことがあるうか。」ということであった。その上、「久しい間柄ではないが、味方に与する兵もあるだろう」と予測していた楠木の考えこそ、最も賢明である。

それでも、戦が難儀であるならば、立て籠もろうとして、金剛山の麓の千早に一城を構えたのである。この城の構えについては、後の巻の評（巻七）に記述しているので、見ておくこと。こうしたことから、京都へ忍びを潜入させ、毎日敵のありさまを聞きだしていた。忍びの数は五十余人であった。

そうしている所に、京都から六波羅（探題）は向かわず、諸国のかり武者・公事武者（いづれも寄せ集めの武者）、かれこれ都合して一万余騎にて下り来ると云ってきたので、楠木は敵の動きにより方針を転じて、天王寺に引き退いた。このことは、『太平記』に記されたとおり、楠木の智謀のなせるものである。

正成京都へ攻め上る由を聞て、騒動せし事。

（官人は天下の広狭・軍勢等を知る）

○これを評して云えば、異朝では雑民（一般庶民）百人を司れば、号して宦（官）人という。そうであれば、官人である者の役目は、一天下の広狭、国郡・村里の家屋、土民の数を知り、またはその村里の法、風俗・行跡（ふるまい）・賢愚・親和等の事を知ること。また、その村里の図を知ることである。

その理由は、天下の広狭を知ることが、国郡・村里の広狭を知ろうとするためである。国郡・村里の広狭を知っておくべきなのは、戦場に赴く時、軍勢の多少を知るためである。村里の家屋と土民との数を知ることができれば、他の村里に軍を発するのに、その勢の多少に応じた方策（手立て）がある。

（良将は敵国の広狭・賢愚等を知る）

また、法と風俗と行跡と賢愚とを知っておくべきなのは、良将がこれを知れば、敵国を亡ぼすことができるからである。先ず広狭については、敵国に対して、その五倍の軍勢を以て向かうものである。敵国が賢ければ強く、愚かであれば弱い。愚かにして勇敢なこともある。これは、勝ち易くして、亡び易い。賢いが勇敢ではないこともある。これは、勝つことは稀であるが亡び難いものである。

（君臣親和の国）

また、君と臣の関係は、君臣親しければ強く、疎かであれば弱い。和であれば争わず、争わなければ強い。和でなければ争う。この時は弱い。法を知っておくべきなのは、法によって民は君主を怨み、または親しむからである。民の風俗により、恨むべきことを恨まなかったり、喜ぶべきことを喜ばずに、かえって恨んだりする。こうしたことから、風俗と法とを相対して知っておくべきなのである。行跡について云えば、主は体、臣は影の関係であるから、民の行跡を見て、君の行いを知ることになる。

（弱きを捨て強きを以て攻めよ）

このような事々を分別し、自国と相手国を対比して自らの弱きを捨て、自らの強い所を以て攻めよというのである。自らの弱きを捨てよとは、敵国の善いとされる行跡であれば、先ずこれを取り入れて実行し、そうした後に、その行より善いものが有れば、これをなせというのである。智謀とは皆、そうしたものである。このようにするのも敵を討ち亡ぼすためである。

（村里の図にて敵国を知る）

また、村里の図は、敵国の難所を知っておくため、または村里の善悪を知っておくためである。これは、学問の初めにして根本である。こうして善道を知り、謀について知るために、大昔からいわゆる書典というものを学んで、それを実行してきたのである。

こうしたことから、我が国においても、先ず幼少の時に、五畿（畿）七道・六十余州について教え、国の大小、人の財力、諸民の数を知らせるのである。今、和泉・河内の両国の勢士を数えると、一万人の兵士に足りない。これを以て京を攻めたとして、どうして利があるうか。

(両六波羅・高時の暗愚)

仲時・時益は、このことを知らなかった。正成が京都へ攻め上るといふ情報が告げられるのを聞いて、驚いたことは、浅ましいことである。京都の政務を司り、六波羅に据えられるほどの人が、和泉・河内の広狭さえも知らない。まして山陽・山陰・南海・西海等の広狭・風俗・親和・行跡について知っているはずがない。このように愚かでありながら、天下の政務を司ることを欲するとは、諭えるものすらない。これ等の愚人が六波羅に成り上がったのは、高時もまた愚かな闇主だからである。これは、高時入道だけの恥ではない。誰であれ、末代においても恥ずべきことである。

○隅田・高橋、河内へ向かうに付いて、

(隅田・高橋派遣は拙策)

○これを評して云えば、京都には軍勢が六万余り有ったので、渡辺へ二万余を差し向け、二万余を飯盛(四条畷付近)方向から、二万余を大和路方向から進ませたならば、正成もまた、河内に留まることができなかったのを、そのようにせずして隅田・高橋を向かわせたのはどういふことか。また、高橋には笠置攻めにおける不覚があった。敗軍の將は再び謀らずという格言さえ有るのに、この頃の日本一の名將正成が、関東(鎌倉幕府)を亡ぼそうと命を一毛に類し、義を金石になぞらえて(命を顧みず、義に殉ずる覚悟で)、固めている堅陣へ、かの不覚人である高橋を向かわせたとして、万に一つも負けないことがあるだろうか。これほどにも思慮が無いのは、なんとも拙いことである。

(楠木の布陣・作戦は賢策)

○正成が二千余騎を三手に分けて、住吉・天王寺に隠し、渡辺へはわざと三百余騎を向け、敵に橋を渡らせて討とうと企んだことは、最も賢いことである。

○これを評して云えば、正成は三百余騎にて橋を守らせて、しかも橋を破壊しなかったのは、謀が足りないと、後に新田(義貞)殿が云われた。そこで、正成が云うには、「万一、貴殿などが向かって来られたならば、橋を破壊していたでしょう。その智慧が敵に在ったならばのことです。隅田も高橋も、その智謀・軍立ち(いくさたち)をことごとく知っておりましたが、彼らは西国の勢であれば少しは思慮するであろうこととせず、また、このように取るに足らない小勢であれば橋を破壊するはずなのに、そうではないことを不審に思いさえもしない者共です。それゆえに、このように計ったのです」とのことであった。義貞はわが意を得たり、と大いに喜んで笑ったのであった。

(楠木退治の軍勢)

また、楠木が和泉・河内を退いたとしても、残る勢(楠木以外で大塔宮に与する軍勢)一万余騎は有るのだから、少なくとも一万余騎にて向かうべきであったが、それを七千余騎で向かったことは、大なる不覚であったとされる。

その上、京に軍勢を残して何をしようというのか。もしも近江(おうみ)国などに別の敵が在るならば、そのようなことも必要になるが、日本全国で楠木の外に敵いないのである。そうであれば、京中に何十万騎もあれば、残らず向かうべきではないのか。

京勢、河向かひに引へたる楠が三百余騎を見るに、敵的分際左こそと欺ひて、七千余騎河を渡す事。

(京勢の不覚)

○これを評して云えば、一つには和泉・河内の勢はどうしてこれほど少ないのであろうか。きつと隠し勢があるのだろうか。二つには、これほどの少数でここを防ごうとするのに、橋を破壊しないという事があるだろうか。きつと隠し勢があるのだろうか。三つには、河に乱ぐい・逆木を設けていない。きつと隠し勢があるのだろうか。この三つは、いかなる愚将でも考えるべき智謀であるが、一つとして思い抱くこともなく

川を渡したのは、不覚の最たるものである。

○楠が勢三百余騎、遠矢少々射捨てて、天王寺の方へ引退く。京勢追ふ事一里（約四キロメートル）也。
（良将は小勢を以て大勢とす）

これを評して云えば、「凡そ良将は小勢を以て大勢とす。愚将は大勢を以て小勢に当てる※」と云われるのは、この一戦にありと見ることができぬ。（※ 義経は鴨越を一万余騎にて落とす、平家六万余騎を退治した。これは皆、不意を討ち、小勢を大勢にする法である。）楠木は二千余騎の小を以て、京勢の七千余騎に当てた。隅田・高橋は七千余騎を以て、楠木の三百余騎に当てたのである。

（渡河追撃の戦法）

およそ河を越えて三百余騎の敵を追うのであれば、五百余騎を一手になして、これにより追わねばならない。敵が軍（隊列）を乱さずに引けば、後からまた五百余騎を一軍として指し遣わし、先の五百余騎は、敵の三百騎の中へ駆け入り、駆け乱して討ち捕るのである。後ろの五百余騎は、軍を乱さずに、後方を付き随うようにせよ。その外の六千余騎は、備えを堅くして、敵の力の程度を見るべきであるのに、（六波羅軍は）三百余騎の敵を討とうとして、七千余騎を残すところの兵も無く、軍を乱してしまつた。もしも敵が偽って退却し、背後に勢を隠してあつたならば、何者がそれに対して戦つたのであろうか。

（壬申の乱の故事）

その昔、清見原の天皇（天武天皇）が、大友皇子と戦われた時、備中の州において軍を駐屯させられた。（大友の隠し勢の計）大友は数度の戦いに負けて敗軍を集め、三万余騎となるが、その内二万余騎は二里（約八キロメートル）退いて山中に隠し、一万余騎にて陣頭に出て戦わせた。帝は自ら向かわれ、官軍十八万騎を以て皇子の勢を討ち倒さんと進まれた。

（豊浦の諫言）

この時、豊浦の勝根（かつもと）という大臣が、諫言を奉りて申すには、「皇子の勢がこれほど少ないとは思えない。本当にこのようであるならば、城に籠るはずであるのに、平地にて戦おうとするのは、いかにも不審である。後ろにいくらか勢を隠し置いているに違いないので、味方の軍勢の半分を後ろに残して、攻め駆けよ」と下知したのであるが、大勢は耳にも聞き入れず、我先にと進撃したので、帝も自ずから御座を動かされた。勝根一人は進まず、自分に従う軍勢二万騎にて、深山の麓に布陣したのであつた。

やがて、大友は戦う真似をしながら三里ばかり逃げ、險阻を超え、河を渡つた。帝の御勢は十方に分かれて追いかけたが、やがて疲れてしまふ。これに対して大友は、前もって隠しておいた二万余騎を出撃させ、軍を堅くして備えを調べ、つづみを打って向かつてきた。帝の御勢は、それまでに疲れている上、十方に分散して一箇所に集まらず、帝は百騎ほどに護られて退かれること三里、大友は勝ちに乗つてこれを追う。その時、勝根は大友の勢が疲れて散っているのを知り、二万余騎にて官軍に加わり、大友の勢に向かつて軍立ちした。大友の勢は、再び負けただけではなく、皇子も討たれてしまつた。

帝はお喜びになられて、「勝根に従つた兵士は、全く人間ではない。天が朕を憐れんで兵を降されたのである。勝根もまた、人間ではない。天が勝根の魂と入れ替わられたのである」と仰せになられ、軍勢どもも「この勝れた功績は、皆天の御計らいである。兵が剛毅か臆病かではない」などとつぶやく者も多かつたという。

実際には、このような戦であつたのを、後世の物語として誰もがよく知っているように軍勢二万余騎が来て、帝を守護いたしたと云われているのである。当時、遠国にはこのように伝えられたのであつた。「君が代は二万の里人数そひて」という歌には、このような意味があるのだ。

（隅田等、先蹤に学ばず）

こうした先人の偉業があるのだから、隅田・高橋も、少しでも物事を深く知っていたならば、この程度

の是非などに迷うことは無いはずであったのだが、彼らはただ愚かにして書を学んでいないだけなのだ。

楠木、三つに兵を分けたる事。

(楠木が兵を三軍に分けた意図)

○伝えられるに、正成が後に息子の正行に語ったことには、「河端に控えていた三百余騎を追いかけるのに、敵二千余騎が軍を乱したものとしよう。残りの五千余騎は、きつと軍を立てて寄せ来るであろうが、先に軍を乱していた二千余騎は、四方八方に散乱しているのである。敵五千余騎と味方の千余騎との戦いでは、味方が良将であれば、大方は戦いに勝つ。万に一つ、大勢の敵に、小勢である味方が打ち負けたならば、敵は残るところ無く軍勢の屯(たむろ)を乱しているのであるから、住吉に隠しておいた八百余騎が軍を堅くして、この散乱している敵軍に駆け入れれば、どうして勝てないことがあるか、と思うようにせよ。これらをこそ、『敵の意を量って、軍(いくさ)に勝つ』というのだぞ」とのことであった。「誠に深い分別、智謀であることか」と人は皆、申し上っていたという。

(奥の奥を謀った楠木)

○これを評して云えば、「謀は奥に奥あり」とされるのは、このことである。天王寺の軍勢だけでも勝てるものを、さらに、もしも負けたならば、こうして勝つべきと計画していたこの完璧さ。正成は、ただの人ではなく、多聞天(毘沙門天)の生まれ変わりであるにちがいない、と云われる所以である。

隅田・高橋、天王寺・住吉の勢を見て、引退きし事。

(隅田等は無知で臆病)

○これを評して云えば、一つには智慧が無い。この上なく散り乱れている軍勢に引けと下知するのであれば、どうして一箇所に集めないのか。また、偽って引くような事もあるが、このような場面でもない。事前に用意して、後ろに軍勢を隠したりしても、愚将のうそ逃げは、後には本当の逃げになり、下手の双六の遅れは、後にはまぐれ(双六の勝負で、下手な者が「遅(後)れ」の戦法をまねると、本当に後手にまわり、そのまま負けてしまう)とさえ云われる。事前の用意も無く、乱れた軍勢に引けと下知したのでは、負けないはずがないのだが、こうしたことを考えるだけの智慧が無かったのである。二つには、臆したのであろうか。将が勇猛であれば、引くことなどあり得ない。よい謀を云えば、高い場所に上がり、笠印を立て、ここで討ち死にするのだという形勢を味方に見せれば、勇気ある者たちが集まって、暫し戦うことになるだろう。それでもかなわなければ、引くべきである。そうすれば、負けたとしても軍勢の多くは討たれないものである。それは、手痛く戦って引く勢であれば、敵も恐れを抱くからである。味方もまた、敵を恐れることは少ない。

また、戦わずして逃げるのであれば、敵はこちらを物ともせず、味方は敵を鬼神のように恐れることになる。さらに、激しく戦って相手を手痛い目にあわせて負けたとすれば、将に謀はなくとも、少しは勇があるのに近い。この度の隅田・高橋の形勢(ありさま)には、勇も無く、謀も無い。愚将と名付けるしかないのだ。

(良将と位)

結城親光(ゆうきちかみつ、元弘の乱で、後醍醐天皇の警護にあたり、建武新政の要職を占め、正成らとともに、「三木一草」ともてはやされた。)が、後に正成に質問して、「正成の天王寺の軍が、一里(約四キロ)引き退いて住吉に主要な軍勢を隠し置いたのは、少々遠すぎたのではないか」と申したのに対して、正成は次のように云った。「仰られることは、ごもつともなことです。その理由は、隅田・高橋が良将であれば、仰られるとおりで、少々遠すぎたことでしょう。良将であれば、最初に敵と遭遇した日には、軍備の程度を見る(敵情を偵察する)ものであって、無造作に敵に攻め懸かるようなことはいたしません。

(敵陣を攻める段階)

これにつきまして考察いたしますれば、段階というものがございます。先ず川を越えた日には、三百余の敵を、五百余騎をもって軍を乱してこれを追わせ、次に五百余騎を一軍として、軍を乱さずにこれを追うこと十町(約一・一キロ)程で、險阻(地形障碍)を前に当て、この乱れていない一軍を留めます。そのようにしてから、かえし鼓(つづみ)を討つのです。その時、乱れていた軍も、その場所集まります。また、敵の首を取ったのであれば、大将の陣に直に来るものです。そうして、未の刻(午後二時頃)よりも前には、二つの軍勢は共に將の陣に帰ることになるでしょう。ただし、時刻は場合により異なります。これが、一般的なやり方でありましょう。

(退却時の心得)

また、將の陣に帰ろうとする時には、先の乱している軍を先とし、次の乱していない軍との二つに分けて引くようにします。これは万が一、敵が後をつけて来る場合への備えです。また、乱れている一軍を先に引かせるのも、ばらばらであるのは軍の礼(作法)に反することなので、基本どおりに隊列を整えながら引かせるのです。

さらに、後方の五千余騎は、先の二軍の千余騎が帰って来るまでの間は、大敵の前に在るかのよう軍を備えておきます。二軍が將の陣に来たならば、先ずその二軍を後ろに位置させ、屯(たむろ)宿营地)を整えさせます。これらの二軍と將の陣が屯を整えている間、残る陣は、いよいよ備えを堅くしなければなりません。その後、残りの陣もまた、屯を整えさせるのです。

このようにして、次の日は軍勢を休ませながら、敵の居場所を聞いて、作戦を考えることにします。これにより、正成の作戦は皆、覆されて徒労に終ることになるでしょう。

また、この二軍が引くには、いくつかの状況があります。敵軍を追ってから引く時は、軽く行(深追いしない)のを基本とします。そうであれば、將の本陣から十町(約一・一キロ)進んだところで、十町先まで敵なしと判明したならば、それより遠くを見ることなく、引くべきです。これは二番目のやり方です。

第一には、和泉・河内の兵数は、少なく見積もっても、六、七千にはなりましょう。そして、大将が正成であるからには、川を越えることなく、軍備の程度を偵察すべきです。

また、三番目のやり方は、粗忽ではあるけれども、前述したように五百余騎に軍を乱して追わせ、残る六千五百余騎を五軍に区分して備えを乱すことなく、天王寺まで追うものです。この際、後方の三軍は六、四町(約六五〇〜四四〇メートル)引き下がって進ませます。これにより、先に乱れている軍集団と乱れていない二つの軍集団で、合わせて三つの軍集団になります。

(隠し勢の使い方)

この時に、天王寺の両側に隠しておいた正成の兵が、一斉に風が発するかのように攻め来れば、乱れている一軍は敗れるでしょう。それでも、乱れていない二つの軍集団の將は、鼓を打ちながら進むのです。そうすれば、正成の両軍勢のうち、一軍はどうして破られずにいられますか。また、もしも前方の三軍が正成の隠しておいた軍勢に追い立てられたならば、六町(約六五〇メートル)を隔てた(後方の)三軍を進めるのです。こうすれば、天王寺の勢に必ず勝つことになります。

このようにして河を越えてきた軍勢であれば、五町(約五四六メートル)までは追い、さらに軍を深入りさせることはありませんが、正成が住吉に置いた軍勢は、一里(約四キロ)を進むことになり、戦う前に疲れ果てて戦場に到着することになるでしょう。そうであれば、手立ては徒労に終り、敵が勝利を得られることになりましょうが、隅田も高橋も愚將にございませすれば、そこまでの謀はよもやございませまい。

(正成の隠し勢は迅速)

ただし、万が一にも天王寺の勢に勝ったならば、彼らは軍を乱して、河内までも追うであろうと見てお

りましたので、住吉に鋭兵八百余騎を置いて、正成は控えていたのです。また、彼らは住吉に正成がいるのを知ってはいても、諸国の借り兵であるがため、軽快に将の下知にて動くこともできません。その上、自分の手勢として怠らず合戦の仕方を稽古し、心に掛けている者共でもないので、引くとしてもぐずぐずして遅くなりまずものを、正成勢が一里を進むのは、飛ぶ鳥のごとくでありますれば、彼らが軍勢を進めるよりも先に駆けつけることも、容易いことと考えて、このように致しました」と、このように楠木が申したのを聞いて、結城は感心したのであった。

(将と兵の剛臆)

伝えられるには、正成が常に家の子・郎従、将である者に諫めて云うには、「およそ敵軍と陣を張り、戦を決するときには、何れも味方は無勢、敵は大勢である。例えば、敵・味方の間隔が六町（約六五五メートル）もあるのに、敵から意を決して懸かって来たとする。世間の将は、我が無勢であり、敵が大勢であるのを見て、臆して陣所へ敵を引き寄せて射立て、右往左往するところに切って出ようと思う。これは大なる過ちであるぞ。

大将が臆したのに、どうして兵が臆さずにいることがあるのか。そうであれば、攻め懸かる敵の軍勢を恐れて、臆した者は備えから耐え切れずに脱落するのを、この臆した者が落ちていくのに引きずられて、少し剛である者さえも落ちるぞ。人は勝れて剛毅であるのも稀であり、勝れて臆病であるのも稀ならば、残るものはいよいよ少ないぞ。

(居負け)

兵がまばらになったのを見て、敵は力を得て懸かるぞ。その時、敵は時の声を発して、我が陣へ懸け入る。臆病になつて味方は、堪えきれなくなつて必ず敗けるものである。これを居負けと云うのである。このようにして負けることは、将の不覚の最たるものである。実に以て口惜しいことではないか。

(兵の激励と戦法)

このようになってしまった時は、将自ら軍の備えを歩き回りながら馬を引かせて、下知して云うのである。『今日の戦には必ず勝てる方策がある。我が鼓を守つて各々前進せよ。人に抜きんでた振舞いが有れば、賞禄するぞ。』

諸兵をいさめて我が陣の前に帰つて、馬に乗り、あるいは馬に乗らずとも、敵の攻めかかつて来るのを見て、六町の時は、五町ほど敵が来て、今や一町の距離に近づいたならば、鼓を打つて味方の軍を進めるのである。これが有利であることは三つある。一つには、敵が懸かる時、味方は後れを取り、敵は機に乗る。それでも味方は軍を乱さず、騒がなければ、敵も怪しむであろう。そこで味方が進むことによつて、今度は敵が後れ、味方が機に乗る。二つには、敵は五町余りを懸かり来て疲れ、味方は半町を行くので疲れない。三には、敵は長い距離を進んで陣形・隊形などの備えが乱れ、味方は乱れていない。

敵が三千を一軍として懸かるのに、味方が千の軍にて勝つのも、躊躇せずに断行することにある。その理由は、敵が三千を一軍とし、味方が千を一軍としたとしても、名目に過ぎない。互いに進んで勝負すれば、最前列の五十人、三十人が太刀打ちして負けた方の兵は、どれ程であろうとも、皆敗北するものである。そうして、その勢が乱れた後は、再び備えを調えるのが困難になる。負けた方の兵は、足のままに走り逃げるばかりで、勝つた兵は、周りの動きに自分を任せて、ただ追いかけて行くだけである。こうなれば三千でも多くはなく、千でも少なくはない。

(勇士・強弓)

こうしたことから、将たる者が嗜んで求めるべきことは、頑強で勇猛果敢な太刀打ちのため、鬼神をも欺き、命を塵よりも軽く思うような兵を、正成は十人集めたが、これを二十人選りすぐり、これらに相應しい兵具を持たせる。また、勇敢な強弓の兵士を、これも正成は十人集めたが、二十人を我が馬の傍らに置く。こうして杉の先（陣形）で駆ける時も、また、剣の先（陣形）で駆ける時も、魚鱗（陣形）で駆け

る時も、将が真つ先に進む。この時、敵が太刀打ちしようとして駆けて来るのを、味方は太刀打ちの兵一人につき、射手を一人添えて、間隔を二間（約二〜三メートル）にして射るならば、外れることがあるだろう。敵の動きが少し鈍ったところへ、将自ら懸かり入るならば、たちまちにして勝つ。

（武芸ある勇士は第一の宝）

このゆえに、一軍の将である者は、勇士・強弓をいかにしても集めるようにせよ。また、自分の郎従の子供などを、幼少の頃から常に身近に置いて、その勇気と武芸では何に器用であるかを知らねばならない。勇気があるならば、さらに近くに置いてこれを愛し、その器量に応じた武芸を習わせ、十分に恩を与えて、これに親しくせよ。この世の宝は多くとも、少なくとも、武芸に練達して勇気がある者は、希少な存在であるぞ。天下第一の貴重な宝とは、勇気があり、しかも武芸に練達している人物である。このことが肝要（極めて重要）である。

（初戦勝利の重要性）

その勝ちに乗って追いかく千余騎のあとに続いて、二軍三軍の備えを堅くして乱さず追うならば、敵の二軍三軍の多くは、そのまま破れるものである。また、敵の二軍が懸かって来ることもあるが、味方の二軍三軍でこれを追撃させる時、初戦に勝っているがゆえに、味方の多くは皆、勝つものである。

この時において、敵の総大将が陣を乱したとしても、先陣が勝ったからとて、味方の総大将の陣を乱してはならない。多くの場合、総大将の陣により反撃するならば、味方の軍は数多く破れるものである。このように心得ておかねばならない。

また、敵の大将の陣が破れたならば、味方の先陣を以て追撃させよ。総大将の軍を乱してはならない。これには深い意味がある。およそ敵・味方双方の大将が軍を乱しているところに、負けた方の大勢が、もしも二百人で心一つにして反撃したならば、追いかく味方の軍勢は、数千騎であったとしても、皆敗けるものである。その時、総大将の陣を乱したならば、勝てるはずの敵軍にも、思いの外に負けるものである。

（良将は小勢を多勢になす）

このことは、『良将は小勢を多勢になし、愚将は多勢を小勢になす』と、その昔から言い習わされていることから明らかである。良将であるからといって、小勢を多勢にさせたということではなく、愚将であるからといって、多勢を少なくさせたということでもない。先陣の一軍で勝って敵を追う時、たとえ百人の軍立（いくさだて）が乱れたとしても、味方の軍を乱すことがなければ、敵の多勢を味方の無勢にて追わせることになることから、小勢を多勢になすと謂うことになるのであろう。

これについて、深く心得ておくべきことがある。敵の備えが余りに多勢でありながら敗れたのに、味方の一軍が余りに無勢であれば、討つべき敵を討たずに終わることがある。そうであれば、敵が一万余騎、味方は三千余騎で戦う場合に、味方の先陣の一軍五百騎が、敵の千五百の一軍に対して備えたところ、二軍まで敗れたならば、後の軍を乱してはならない。所詮は敵の強弱と、敵・味方の勢の多少をよくわきまえて、状況判断してから軍を乱して追わせるようにせよ。『敵に応じて転化する』と云うことの意味を戦場において少しでも忘れてはならない」と云ったのに対して、すぐに生地（をいじ）の三郎が正成に質問した。「敵・味方の強弱、勢の多少とは、どのようなことでございますか」。

（謀勇兼備）

正成が云うには、「よくぞ問われたものである。敵の強弱と云うのは、『強』とは、敵の大将が智謀と勇気を兼ね備えているのを謂う。そうであれば、将の陣は乱れないので、味方の軍も数多は乱れずに攻め駆けよ。また、総大将は勝れていないが、諸軍の備えの内に、いずれかの備を司る将の幾人かは、良将の誉れありと謂うのであれば、その軍が乱れないのを見つつも、敵が攻め駆けたならば、これにより勝つものであるから、対の軍を備えよ。また、いずれも良将ではないのは『弱』である。その時は、また味方の

軍を数多乱して追わせるようにせよ」とのことであつた。

生地が云う。「良将か、愚将かも判らない敵には、どうすればよろしいでしょうか。また、総大将が良将である時は、味方の軍を数多乱してはならないとのことですね。敵の軍々に良将の備えが数多あるような時には、味方の対軍はどうすればよいのでしょうか。お聞かせいただきたく存じます」。

(諸国の将の賢愚)

正成が云うには、「およそ武道を心に懸けようとする者は、諸国の将の賢愚を知るべきことが第一である。これを知ろうと常に意識していれば、諸人が言うことから必ず知れるものである。言うことについても、知っておくべきことがいくつもある。人の毀誉(悪口と賞賛)に依らず、その将の行跡(振舞い)を聞け。誉めると云えども、行いが道に外れていれば、愚であると同様に。諺(そし)ると云えども、行いが道に適っていれば、賢であると同様に。人の毀誉は、己の意に合わなければ、愚人を褒め、少しでも己の意に違えば、賢人を誇るものである。ただし、その毀誉する人の行いを見て、分別しなければならぬ。聖なるものに意を懸けている人の云うことは、少しは信じるべきである。

また、その郎従が語るのを聞いて知れ。人の郎従とは必ず、日常では主を諂ると云えども、外の人には誉めるものである。誉める種類によつて、その行跡を聞け。その賞賛が信じられず、さらに郎従が誉めないうちであれば、愚であると同様に。ただし、その郎従の云うことから、その意を先ずは知れ。百に一つも知れないということはない。もしも知ることができないようであれば、その軍立ての様子を見て、賢愚を知るものである。

また、軍々に良将があるような備えの事は、言葉で語るのが難しいので、この図により知るようにせよ。これでも、大よそのものに過ぎない。合戦の場により、敵の師(部隊)に依つて判断しなければならぬ」。そして、図を渡したという。何と奥深きことであろうか。

(大敵に対する戦法)

また、高時が亡んで後、皇居において、高氏・(名和)長俊・正成が一同に会して、合戦の物語が数刻に及んだ。千葉新介が云うには、「敵が多勢、味方が無勢で、広野において戦えば、敵は必ず軍を進めるであります。味方は正成殿の云うように、間が六町の内、五町を過ぎる時、軍を進めることにならぬ。その時、敵がこちらの軍が進んでいるのを見て、その場所に軍を備えて味方を待とうとしたならば、どのようにして勝つことができるでしょうか」とのことであつた。正成が「それは大切な心得でございます。長俊殿はどのように思われますか」と問えば、長俊が云うには、「敵がいかに大勢であれ、軍を進めるのに、味方の進むのを見て途上で備えれば、兵の意識はどんなにか臆することになります。また、思いどおりにはいかないでしょう。とにかく押しかければ、多くの場合、味方が勝つことにならぬかと思ひます。正成殿はどのようにお考えになりますか」とのことであつた。

正成が云うには、「私は、ただ『敵軍の後備え』と『所』と『間の遠近』と、『敵將の剛臆』とによるべきだと考えます。先ず敵軍の後備えやその間の遠近が、定められたとおりにならば、味方も軍を備え、(敵の強弱を知るため)足軽の弓でこれを射させます。一つの部隊を五十人、あるいは三十ないし二十人として、それぞれに下級指揮官を付けて、敵の備えを射させるようにします。敵が弱ければ、その陣は震動するでしょう。その時は、味方の軍を進めます。敵が強ければ、軍を進めて来ますが、必ず備えを乱します。その時に、味方も同じように軍を進めて戦わせれば、勝つことになりましょう。

敵の三軍が敗れば、三軍四軍共に敗れるものです。その時は、敵が皆敗れているので、味方は軍の半分を乱して追わせ、残りの半分は軍を備えて追わせます。もしも、敵の二軍が再び攻めかかってきたならば、敵が乱れていても、味方は軍を乱さず、鼓を打って進めねばなりません。敵の二軍は、必ず味方の先頭部隊に対して進んできますので、味方の二軍が乱れずに懸かっければ、勝てないと云うことはないのです。

もしもまた、味方の先頭部隊が敗れたならば、二軍に逃げ込んでくるより先に、二軍から声を発して軍を進めるようにすべきです。この時は、備えが乱れても、乱れていなくとも関係なく、「杉さき」の陣形に兵を連ねれば、必ず勝つことでしょう。一つの軍の備えの内に、味方の先陣の兵が逃げ込んで来たならば、二つの軍は共に敗れるものです。したがって、先陣の兵が逃げて来る時に、二軍の備えの二間（約三・六メートル）手前で引き返させるのが、最大の勇であり、これが軍法というものです。また、二軍の備えに逃げ入れば、味方であると云えども、これを討たねばなりません。これは、全く同士討ちとは異なるものです。このようにして兵を進めるならば、必ず勝つことになりましょう。

また、『所』とは、敵の主力が備えている所であり、味方が攻め懸かるのに都合が良く、敵が待ち受けるのに利が無ければ、味方は早急に、躊躇することなく、軍を進めるべきです。敵が待ち受けるのに利がある所であれば、先に述べたようにします。また、『遠近』とは、敵・味方の進み寄る間（距離）が三十間（約五十四メートル）以内であれば、近い。そうであれば、味方は軍を進めます。近ければ、その内において敵の右往左往している備えや、騒ぎ立てている所へ味方が攻め懸かって、どうして勝てないことがありましようか。また、間が一町（約百九メートル）もあるならば、味方が進むその内に、敵は備えを堅くするものでしょう。その時は、先に述べたとおりにいたします。

（勇と才智）

敵の大將の剛臆は、いつも申ししているとおりで「ございます」とのことであった。そして、「ただし、これらもその時の状況によるものがございます。兎にも角にも、将には勇気と、生まれつきの才智こそが、あらねばならないものがございます」と申ししたところ、長俊も、千葉も、高氏も、これを信じたのであった。

（楠木の指揮）

○伝えられるには、過ぎし五月十九日、正成が軍勢に下した命令は、「敵が川を渡るならば、川端の三百余騎は、味方を捨て置いて、あわてて逃げよ。敵の追いかけて来る軍勢が、天王寺西の門を半ば通過する時、先ず天王寺に配置した和田孫三郎が、一千余騎を二軍に分けて駆け出よ。そうすれば、敵將の陣は、古宇津（こうづ）、現在の大阪市天王寺区高津付近）のあたりであろう。敵は、思いも寄らぬことなので、あわてて敗れることになる。敵の大將の陣が一手になって右往左往している所へ、思いも寄らぬ古宇津の東から、六百余騎で駆け出て、魚鱗の陣形になって、敵の大勢の中へ破（わ）って入れ」であった。

○また、正成は、渡辺橋の十町（約一・一キロ）こちら側に軍使を派遣して、「敵が川を越えるのを見たならば、早速にも住吉に戻って来い」と命じるとともに、天王寺にも軍使を派遣し、「敵が追って来たならば、先に打って出ること、二十町（約二・二キロ）早くせよ」と命じた。そして、自らは、天王寺と住吉の中間に位置して、くしの歯を引くように（絶え間なく、次から次へと）住吉に軍使を遣わし、「合図があれば、駆け出すようにせよ」と伝えたのであった。

それだけではなく、渡辺に進出して、敵勢を見て、天王寺の味方を下知し、住吉に帰って兵を下知した。その日のうちに七匹の馬を乗り替えたという。合戦では、このようにまで将が心掛けていなければ、無下に負けてしまうものであろう。

（探題の士卒批判）

○六波羅は、宇都宮を呼んで評定をした。仲時が云うには、「今度の軍の負けは、將の謀の拙さによるものだ」とのことであったが、これは理に適っている。しかし、さらに「また、士卒の臆病なるが故である」と言ったのは、正しくない。楠木勢が皆、勇敢であるということはなく、京勢が皆、臆病なのでもない。何に依ってこのようになるのであろうか。また、京勢らがこれを聞いたならば、皆、不本意に思うのではないだろうか。

（正成と郎従の過失）

正成が郎従を諫めるときは、かりにもその悪しきことを云わず、無礼な悪口を吐かない。その郎従の過去の良かった誉れだけを指折り語って、最後に一言、「これゆえに、正成はそなたへ頼んだのである。今回のような過失は、それまでの良き事があればこそ、恥とされよ。気持ちを引き締めて、今後は無いようにせよ」と云って、十日、二十日、あるいは百日の間、対面しないでいれば、その者も情けの深さを思い、我が身にとって何とも恥ずかしく、また誠にかたじけないとだけ思うことから、再び過ちを犯す者は少なく、正成を恨む者もない。人の上に立つ者は、皆かりそめにも、自分の腹が立ったからといって、人に恥をかかせること、無礼な悪口は言わないものである。心得ておくべし。

(楠木と志貴)

また、正成は八尾の別当と数年にわたり戦っていた。ある時、楠木の家の子である志貴右衛門助と云う者が、百余騎にて一城に籠った。別当顕幸は直ちに五十余騎にて、その城へ向かった。志貴は城を出て戦ったが、打ち負けて城へ入らず、郎従十八騎が討たれながらも、すぐに楠木の館に来た。後に、周りの人々がこれを指差して云うには、「別当顕幸と当家は、所領の争いにより、恨み合うこと数年にわたる。そうであれば、その勝負は、折によつて変わると云えども、一城を取られるまでの事は聞いたことが無い。これは法師の師立て(いくさだて)戦の仕方)よりも拙くして、これほどまで戦に負けたのは、法師にも負けたのだの尼僧ではないか。正成殿に対面して、何と言いつつしたのだろうか。恥をさらすよりも、いっそ死んでしまえ」などと、つぶやき笑ったけれども、正成は右衛門に対面して、戦の様子を詳しく聞いてから、これまで右衛門が数回に渡り、戦場での忠義、勇敢な行動や、また賢明に判断して戦った事なども語りだして、「正成が常に申してきたのは、こうしたことであるぞ。そなたは、それほど愚かな師立てをするような殿ではござらぬ」と云い、そして「御身が無事で死を遁れたことこそ、うれしく思うぞ。死んでしまった兵は、歎いたとても帰ることは無い。そうであつても正成、この故に多くの士が討たれてしまったことは、実に不憫に思うぞ」と涙ぐんで、「この度の事、そなたの謀、師立ての間違ひは、ただ正成の天命が間違つたのでこそあるう。そなたの間違ひではない」と云って、再三これを誉め、「馬・物具も、おそらく戦場に捨ててしまったことであろうから、これを召されて、後日の合戦をなされよ」と、馬・物具を与えた。また、討たれた兵たちの妻子を呼び寄せて、皆に米銭・金銀の類をその身分に応じて与えた。人は皆、その情け深さに感じ入つたようであつた。

その後、志貴右衛門助の佐はずつと、このことを恥ずかしく思つていたが、謀をめぐらし、終に別当に取られた城を、半年の内に夜討ちにより取りかえし、恥をすすいだのであつた。これとは比べるべくもないが、舌にまかせて理もなき悪態をつき、諸卒に疎まれていた仲時の心の中こそ、愚かなものである。

宇都宮一人河内へ向へと下知らせらるる事。

(宇都宮派遣は愚策)

これを評すれば、六波羅は闇将であつた。その理由は、楠木の兵は、およそ五、六千もあろう大敵であるが、宇都宮の郎従は、千騎にも足りない。この小勢を遣わすのであれば、宇都宮が鬼神であつたとしても、どのようなにして戦に勝てようか。また、楠木は地理にも通じているが、宇都宮は無案内である。これを喻えれば、卵をもって岩を砕こうとするのと同じである。良い謀を云えば、六波羅殿が向かわれたならば、軍勢はおよそ五、六万騎もあろうか。戦う前に決着がついている。そうであれば、正成が天王寺に踏み止まることもなかつたのである。

宇都宮辞退の気色なく、一命を渡辺に捨んと思ひ切つて向かひし事。

(宇都宮は血気の勇者)

○これを評すれば、血気の勇者である。およそ世に三つの勇者がある。一つには、生得の勇者、二つには、

血気の勇者、三つには、仁義の勇者である。

先ず、生得の勇者とは、生まれつきのものであり、恐ろしい事を知らない。する事をも、顧みない者がいる。心が健やかであるだけで、遠く慮ることができない。

また、血気の勇者とは、生まれつき勝れて勇氣があることもない。また、あなたが臆病だということもない人である。そうではあつても、腹を立てて怒る時か、または、人に頼まれると即座に受け易く、また、主人に言葉をかけられなどして、何につけても血氣に乗り、上がっている時に、勇氣が湧いてくるならば、炎の中や深い水底へも入り、鬼神をも恐れず、剛をなす類である。時が過ぎれば、その勇は少しも無く、人を恐れる気持ちさえあるのだ。

さらに、仁義の勇者とは、常に事を慎み、行いに失がないだろうかと省み、一命の重きことを思量して、周りの人への礼を厚くし、和を施し、事の切なるに臨んでは、全てを受け容れて遁れず、勇敢に死する者を云う。

今の宇都宮は、血気の勇者である。これほどの名将である正成が、日本の国を覆そうとして、数千騎で控えている堅陣へ、千騎に足りない小勢で攻め寄せたところで、千に一つも勝つことなど無いのだから、ただ討ち死あるのみ、と思ひ定めたのであつた。義に応じ、節に臨んで快く死するのは、勇士の好んでなすところである。この程度の事で死するのは、味方は損、敵には得である。その上、もしも宇都宮が討たれたならば、味方はいよいよ敵を恐れ、敵は益々勝ちに乗るではないか。これらの事を判断できなければ、どうして血気の勇者ではないと云えようか。

宿所へも帰らず、直に六波羅より、わづか郎従十四、五騎にて下りし事。

(宇都宮の出陣)

宿所に帰り、東国からはるばる上ってきた郎従たちに、事の次第を言い聞かせて、軍の評議をしてから下るべきであつた。

このように早速に出ることも、場合によってはあるだろう。もしも、味方の城などが敵に囲まれて、後詰めの勢が遅ければ、一日か二日で落ちるようなとき、または敵が急に発して、八幡・山崎の辺りまで寄せていたなどの場合である。しかし、それさえも敵がどのように動くかを知らなければ、遠くまで向かつてはならないとされている。

または、敵が出て来て、俄かに旗を揚げようとする時、方々に引き募らないうちに先手を打とうとしたり、敵に返り忠の者が出来て、急いで時を定めたような場合にも、有り得るだろう。しかし、宇都宮の場合、取り分け仔細も無ければ、一日二日延引したとしても、何の損得もあり得ないのだから、十分に用意して下るべきではなかつたか。

さらに、道に行き逢う者をば、権門勢家(権勢のある門閥や家柄)とも言わず、乗り馬を奪い、夫を駆り立てて通る事については、味方の路において何事であろうか。このような行いは、敵国に入っていく時、威を逞しくして、人に恐れられようと思う時には、それなりの効果があるだろう。それさえも、武道の本來有るべき姿ではない。さらに、深い謀もないとは云えども、味方においてこのように軍の法も乱れていることが知れ渡るならば、敵が侮る端緒となるだろう。または、敵が味方を計るための情報となるものである。その上、大昔から、戦に出向くことは、国を奪うためではなく、ただ天下の万民を豊かにさせようとするためである。それを、先ず民を苦しめるような事をするのは、大いなる過ちである。

和田孫三郎、正成に申し様の事。

○これを評すれば、若い者であれば、一往の強さを誇示して、宇都宮の陣へ攻め寄せようと言うことは、臆して巧くいく合戦を逃してしまふよりは、大いに勝れている。その上、正成が攻め寄せたならば、味方

が多く討たれたとしても、戦は必ず勝つ。これらは、通常の将の判断としては、最も良いものであろう。

(楠木、負けの勝ちを選ぶ)

そうではあっても、これは当面の勝ちのみを見て、後日の戦を配慮しておらず、謀としても不十分なものであれば、良将とは言い難い。それに比べれば、正成の謀こそ最も深い。これこそ真の良将であると云えよう。その意味するところは、宇都宮と決戦すれば、『太平記』のように、味方の若干は討たれることになる。宇都宮は、六波羅に持ち上げられて、頭に血が上り、炎の中さえも飛び入る覚悟であると思われるが、上の好む所、下もなすものであるからには、七百余騎は皆、血気盛んであるに違いない。そうした所に正成勢が攻め寄せたならば、味方が勝つにしても、多くが討たれることになる。

そうであれば、高時は宇都宮が死んだとしても、負けは少ない。もしも、正成の七人の郎従の内、一人が死んだとしても、正成は大なる負けとなろう。このような戦には、負けて勝ち、勝って負けるという事がある。これでいこう、と決心して、天王寺から退却した後、漸くして血気の失せてしまう時を待ってから、嶺々に篝火を焚いて、「敵を蒸す」戦法を執ったのである。これこそが最も妥当である。

○伝えられるには、世が鎮まって後、足利直義(ただよし)が正成に質問したのは、「元弘の合戦において、宇都宮が向かってきたのに対して、正成が戦わずして天王寺を退いたのは、謀としては巧みであるけれども、諸人の見聞する手前、余りにも穏便に過ぎたのではないか。これから後も、こうした事があるかもしれないが、この度のように敵から退かず、味方が討たれず、勝てる軍立ちは無いものであろうか。お伺いしたい」ということであった。

(良将は世愚の言を用いず)

正成が云うには、「名医の前には、薬とならない草木は無い。また、毒ではない草木も無いと申し伝えられるように、良将の御目の前には、こうした謀はいか程にもあるだろうと思われる。よくよくお考えになられよ。そうではあっても、正成の思うところを申し述べましょう。およそ良将は、世の中の愚人の言うことなど用いないものでございます。もし、正成がこの前に大敵にさえ打ち勝ちながら、この度の小敵を恐れて天王寺から退いたのは、全く浅はかなことだ、などと武の道を知らない者が幾万人も申したとて、戦に弱くなるようなことにはなりません。人が左様に申すことを恥じて、合戦に及んだならば、若干の味方が討たれるのに加えて、大量に弓矢を、消耗することは間違いありません。

(始終の勝)

いずれにせよ、戦とは最終的に勝つことこそが良いのでありますれば、左様なお考えであれば、死ぬべきではない所にて、御家の子・郎従を数多死なせることになりました。くれぐれも、今後はそのようなお考えを持つてはなりません。

正成も天王寺から退却した時、あれこれと多くの事を考えました。一つには、要害に陣地を取り、射手・足軽・野伏を前に進めて敵を招き出し、味方は沼か高い岸(崖)を前にして、弓の兵を伏せて(隠して置いて)、前に進めた弓の兵を、敵が追って来るのに応じて陣地近くまで引き寄せ、その距離が五、六間(約九、十一メートル)に及ぼうとする時に、腕ききの兵に射させてはどうでありますか。敵は攻め懸かっているのが有利でなければ、堪えきれずに引き下がることになります。敵が引いたならば、再び前に進めていた兵の足軽により、追わせるのです。

(宇都宮の智勇)

敵が折り返して来たとして、前回と同じように味方が伏せて陣取っていた所へ、突風が吹くかのように血気づいた宇都宮勢が返しては攻め、返しては攻めて、四、五度も追って来るのを、正成が何度も左様にあしらうことになるうと思われませんか。いやいや、宇都宮は東国無双の弓矢の達人です。たとい血気づいたとしても、その手立てに乗ることはあり得ませぬ。正成の陣前へおよそ三町(約三三〇メートル)程も追って来て、返し鼓を打ったならば、この謀は失敗に終るのではないでしょう。そのようなになれば、宇

都宮の小勢と、楠木の大勢とが互角の戦いになってしまいました。これも良いことは無いと思つて、採用しなかつたのです。

また、夜討ちにするにしても、宇都宮はたいそうな勇士であるから、油断などするはずがありません。夜討ちというものは、敵の思いも寄らぬ所へ押しかけて、途方に暮れているところを討つという謀でございます。楠木がもしも攻め寄せたとしても、宇都宮は全く動転することの無い者でありますれば、これも断念したのであります。

(両虎の戦い)

また、天王寺において、宇都宮が寄せ来るのを待つにしても、敵が小勢でしかも将は宇都宮であれば、正成が数多くの備えを立てたとして、一陣や二陣を破るとしても、それ以外の多くの陣は破られることはないだろうと思つて、軽率に進んではなりません。その時、正成は、鶴翼（左右を前方に張り出した陣形）になつて敵を包囲すれば、敵は三軍に備えを分けて、左右を顧みず、味方の真ん中である鶴頭のみを目標けて突き進んでくるでしょう。そうなれば、両虎の戦い（大将同士の間）になりましょう。

宇都宮の軍立ちからも、さほど手立てが拙いという大將にはございません。敵の七百余騎は、仮兵（駆り集めた軍兵）ではなく、しかも遁れることができないことを知っております。正成の二千余騎は、その内五百余騎だけが金鉄の（精鋭な）郎従であればこそ、このように計らつたのです。良将であれば、これより優れた謀もございましょうが。そなたのお考えになる謀を詳しくお聞き致したく存じます」と申したならば、直義は打ち笑つて、「何とも賢明にございます。直義なんぞ、それ以上の手立てなどある筈がございませぬ」と云つた。

(宇都宮・探題は闇主)

○これを評するに、楠木が天王寺から退いたならば、京（六波羅）に加勢の兵を要請し、宇都宮は自ら河内へ出立すべきであつた。また、宇都宮が加勢の兵を請わなくとも、仲時が良将であつたならば、即日軍勢を下すべきであつたが、宇都宮も仲時も、謀の無い闇主であつた。一を以て万を知るといふ理によれば、これを以て知ることが出来る。

正成が天王寺から退かない謀に及んだとしても、敵をその手立てに落とすことは間違ひなかつたが、それでも天王寺から退いたことは、正成の謀が、敵の智謀を深く思い、敵の意図を考察したもので、（敵はもつと愚かであつたことから）実際には外れてしまった。ただし、敵を侮つていたならば、このようなことは全くありえなかつたと、後の世の人々も語つているように、それは実に理に適つたものである。

正成所々の嶺々に篝火を焼く事。

(楠木の篝火作戦)

○伝えられるには、正成が野伏を駆り集めたというのは、宇多・内の郡（吉野・金剛山に連なる地域）、八尾別当などに相談して、三千余人を動員して所々の嶺々に篝火を焼き、足軽の兵三百余人、野伏一千余人をその後ろに立たせて、「えい、えい、やー」と声を発し、攻め込むように装つて、しかも攻め寄せない。宇都宮はこれを見て、一戦しようと打つて出たならば、楠木の軍勢は遠くから矢を射るだけで引き退く。宇都宮もさすがに無勢なので、長追いをすることなく、引き返せば、楠木勢が追いながらこれを射る。

また、この戦いの半ばで、思いもよらない方向から、時の声を発して、突然に篝火数多を見せつける。宇都宮の足軽兵たちは、先の戦を捨て、天王寺へと引き退くが、残党が少々討たれてしまう。また、その次の夜も、篝火を数多の場所に焼いて、寄せ来る勢を見せると、宇都宮も勇気を奮い起こして待ち構えたけれども、楠木勢は来なかつた。次の夜も、前日に同じであつた。四夜を過ぎして後、正成は篝火を焼かずに、天王寺の東において一千余騎の軍勢で、時の声を発した。宇都宮はこれに応じて出撃した。

(宇都宮の撤退)

その外、あるいは天王寺へ忍びの兵を潜り込ませ、宇都宮の陣所を焼き、あるいは思いも寄らぬ方向から足軽が来て矢を射、時の声を発する。このように敵を悩ませて実の戦はしない。宇都宮は、なす術が一つも無く、勇気も失せて引き退いたのであった。

○これを評するに、宇都宮が天王寺から引くのであれば、楠木は足軽の弓兵を繰り出し、その後ろに千余騎の兵を備えて、敵が引けば追いかけてこれを射、返せば鳥が散るようにして引き、敵をあくまで悩ましてから、千余騎で攻め懸ければ、たちどころにして敵を河に追い落としたであろう。宇都宮が云うには、この時ほど楠木を深く恐れたことはないとのことであった。

(楠木が追撃をしなかった理由)

正成はこれを聞いて、八尾別当に語ったことには、「宇都宮が引くところを討とうと思えば、謀はいくらでも有ったことでしょう。しかしながら、戦というものは敵の心を深く見ることが第一でございます。宇都宮の思いは、この度、摂津・河内方面で楠木と華々しく一戦を交えることも無く引き返したことは、実に無念であったことでしょう。二、三日の彼の師立てからもよく見知ることでありました。正成が天王寺の僧衆に心を通じて、彼の思いを見たり聞いたりしたところでは、言うことも、行いも、楠木と一戦して命を戦場に散らそうとのことばかりでありました。

中でも印象深いのは、彼が郎従に対して、「正成は名だたる良将であるから、一戦を交えて勝負を決しようと思つていたが、実の戦はせずに、夜討ちをするかのように振る舞い、宇都宮を無勢と思ひ侮つていたのは、無念である」と口惜しがりながら言えば、郎従どもは打ち笑つて、「公綱殿の勇猛さに恐れられたからこそ、楠木は戦をしなかったのでしょう」と述べ、宇都宮も「いやいや」とだけ言つたことである。

およそ、将が軍を引き退く時、常に合戦を意識していれば、過ちは犯さないものでありましょう。胸中に合戦なくして、引くことのみ思つていれば、必ず不覚にも兵を多く失うことになりましょう。そうであれば、皆様が申される様に、正成が軍を立て向かおうものなら、どのようになつていたでしょうか。宇都宮が魚鱗の陣に備えて足軽の兵を追い立て、味方の千の一軍に懸かつて来たならば、両虎の戦いとなつて、敵も味方も、大半は亡ぶようなことになりました。朝敵は宇都宮だけではないのだと思ひ、そうして素直に引き退いてきたのですぞ」と云えば、別当は信服したのであった。

別当が「大将の胸中に戦が有ると無いのと、その善し悪しを述べられるのは、いかなる事なのでしようか。私には理解できません」と尋ねたので、楠木が云うには、「将が兵を引き退けようとする時、敵は必ず付いて来るものです。時に當つて、将が引くことだけを思えば、敗北をまぬがれません。これは、大いに悪しきことであります。

(引く時の陣立次第)

また、胸中に合戦が有るといふ事には、様々なものがあります。一つには、数万の兵を出陣させて、広野に六軍の備を堅くし、軍使十余人を以て先陣の一軍を乱して、味方の後陣に立て、次に二の軍を乱して、先陣の後ろに立てる。軍使の下知と云うのは、先陣の一軍の兵を味方の後陣に立て、鎮まつた後に、軍使などが走り来て、二の軍を乱して引かせる。そうして、三の軍へと次第に引くようなのを云うのです。その意図するところは、敵がもしも追つて出てくれば、その時の全軍の状態で、いつでも一戦を交えられるためです。これを戦が胸中に有る将と申すのでございます」とのことであつた。

(引く敵を追撃する戦法)

別当が云うには、「正成殿が万の兵でこのように戦をされるならば、別当は五千を以て追つて出る謀がございます。それはどのようなものと申せば、味方五千の軍を、さも敵の軍の数のように備えて、難所を前にして備えを堅くし、足軽の射手に矢を五、六本ずつ腰に差させて、一組二十人、多いところで三十人として、敵が先陣の一軍を乱して後ろに立たせようとする間に、第二の軍の備を射させます。敵がもし、

その軍を前進させれば、鳥が散るようにして退き、敵が引けば後に付いて追いかけて、矢を發します。もしも、敵が味方の備える軍の近くまで追い来たならば、味方の軍の備えからこれを射ることにより、敵が懸かることが出来なくて退けば、また、先ほどの足輕の射手に、これを追わせませす。味方の軍の立て方は、縦横、思いのままにいたします。

そうして、敵の一軍が、再び風の發するようにさつと引けば、次の軍の備を射ることで、負傷して死する者も多いことでしょう。このようにして、敵軍が次第に弱くなっていく所へ、味方諸軍の備を、敵軍の後尾と味方の先陣との間が六町（約六五〇メートル）から八町（約八七〇メートル）にして、軍を三つに分けて、その二つを先に備え、間を五町（約五五〇メートル）ほど隔てて、もう一つを後や傍らに備えませす。先陣は横隊にして後陣は縦隊に、先陣も軍と軍を横に、または縦に、それらは状況により、地形によるのでしょうか。このようにしながら、なお足輕の兵によりこれを射れば、多くの場合、敵は敗亡することでしょう。もしも、大事にならずに退いたとしても、多くの負傷者や戦死者を出すことになると思いますが、いかがでしょうか」とのことであった。これを聞いた正成は、打ちうなづいて、「最も良い手立てでござる。下手な将であれば、必ず敵の擒（捕虜）となりましょう。正成のように戦いの要諦を弁えているならば、そのようにされることはありませんまい。その理由は、敵五千余騎の中から、足輕の射手を多くの組にして出せば、味方一万余騎の中からも、足輕の射手を前進させてこれを受け、適当にあしらっている間に軍の備を繰り入れることになるでしょう。

（二陣に分けて戦う戦法）

また、味方の兵が半ば入れ替わっている所へ、敵が五千余騎を出して、六町から八町を隔てて陣を備えるならば、好むところの幸いです。味方も二つに分けて、先ず五千余騎の陣營を整え、備を張り出して、その距離が三町（約三三〇メートル）、近ければ二町（約二二〇メートル）にもなろうとする時、鬨の声を發して敵の陣に攻め込めば、敵は全く動けません。その時、敵の後ろに備えている兵は、二千にも満たないのです。敗れたならば、素よりのこと、軍を進めれば、味方は五千余騎であり、その後ろにも軍を堅くしてあるのに、どうして勝たないことがありますか」と云えば、別当は「もつともなことでござります。そうであれば、その時の軍の備をご教授いただけませんか」と求めてきた。楠木は、「図ですね。お見せいたしましたよ」と云って、即座に図を書いて別当に見せた。

（八尾、楠木に心服）

別当は信服して、過去の出来事、昔からの遺恨を捨て、正成を信頼するようになった。「それでは、貴殿の一族どなたであれ、幼き者を一人養子に下され。愚僧（私）の跡目一式をお譲りいたそう」と云ったので、楠木は打ち笑って、「さては、御坊（あなた様）は今まで、昔の遺恨を捨てておられなかったのですか。正成は、大君に頼まれて参つてからこれまで、天下の御事こそが誠に大事と思うが故に、私の遺恨など露ほどもございませせん。幼き者につきまして、そのように仰せられるこそ、時に及んで喜ばしきことございます」と云って、すぐに和田の三男・満仁王丸（まにおうまる）という名の十一歳になる子供を、別当に約束した。別当は、それから後、無二の忠勤に励むようになったという。後に和田新發意源秀（しんぼちげんしゅう）と名乗って誉ある者こそは、この満仁王丸のことである。

また、その時、正成が別当に語りかけて、「朝敵が宇都宮だけであったならば、公綱を討つべき謀は、いくらでも有りましょう。宇都宮は六波羅探題からすれば、所詮は九牛の一毛に過ぎませせん。鎌倉勢が下つてくるであろう時にこそ、十死（決死）の謀をも致さねばなりません。宇都宮を倒すのに骨を折ったところで、結局の勝にはなりません」と申したのに対して、別当は「御もつとも」と同意したのであった。